

「英語教育改善プラン」に基づいた教員の英語力・指導力向上に向けた取組 「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～佐賀県～

- I すべての小学校に、教科「外国語」を指導できる小学校教員を複数名配置するとともに、指導力の向上が必要である。
- II 中学校及び高校英語科教員の英語力及び指導力の更なる向上が望まれる。

取組内容について

1. 国の事業を活用して以下の研修等を実施

- ◆「小学校教員英語指導力向上研修」
 - 小学校161名
- ◆小学校伝達講習フォローアップ研修会
 - 小学校中核教員50名
- ◆「佐賀大学英語力向上研修」
 - 中・高英語教員34名
 - 佐賀大学での2日間の研修(8月～9月)
 - TOEIC IPテスト受験補助(中高英語教員対象)
- ◆「英語教育推進リーダーによる伝達講習」
 - 小学校50名、中学校50名、高校50名
 - 教育センターでの3日間の研修
- ◆「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」における研修協力校
 - 英語教育推進リーダーの在籍校を研修協力校に指定し、中央研修の内容を実践した授業公開を行った。

成果の波及や周知については、公開授業やHPで行うこととしている。

成果(中高教員対象研修)

◆佐賀県の数値目標(①～③について)

- ①求められる英語力を有する英語担当教員の割合
- ②求められる英語力を有する生徒の割合
- ③英語担当教員の授業における英語使用状況

◇英語教育実施状況調査結果に基づく達成状況

【高校】

	H27	H28	H29	H30
①	66%	79%	85%	87%
②	31%	34%	33%	37%
③	51%	60%	59%	57%

【中学校】

	H27	H28	H29	H30
①	30%	36%	38%	37%
②	32%	27%	33%	32%
③	55%	66%	66%	67%

成果(小学校教員対象研修)

- 小学校教員研修後のアンケートより
 - ・教材のアイデアや活動例、発音等で注意することを、ロールプレイ形式の演習で学び、児童の達成感や困り感を疑似体験できた。
 - ・細かく発音の仕方を学べたので、発話能力向上に役立った。継続して発音練習やクラスルームイングリッシュの練習をしたい。
 - ・文科省から出ている資料について教えていただいたので今後にかかすことができる。校内研を実施し、共通理解を図りたい。

今後の課題・方向性

教員の英語力及び指導力向上が生徒の英語力向上につながるという考えに基づいて研修を実施しており、中高についてはその成果が出ている。また、小学校教員についても、アンケートから分かるように、自らの英語力を高めることや指導法改善に積極的な姿勢が見られる。

しかし、英語担当教員の授業における英語使用状況については、中学校で横ばい、高校では減少傾向となっており、特に上級学年になるほど教員の英語の使用が少なくなる。

今後については、引き続き教員の指導力及び英語力向上に資する研修を継続するとともに、CAN-DOリストの見直し及びそれに基づいた指導やPDCAサイクル構築を強く促す必要がある。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～佐賀県伊万里市立立花小学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

【課題】

- 教材研究と発音等を含めた自身の英語力に対する不安を抱えている教員が多く、大半の授業をALTがT1，HRTがT2をしているという実態がある。
- 児童のほとんどは外国語活動の時間を楽しみにしているが、興味が持てず意欲的に参加できない児童もいる。

【手立て】

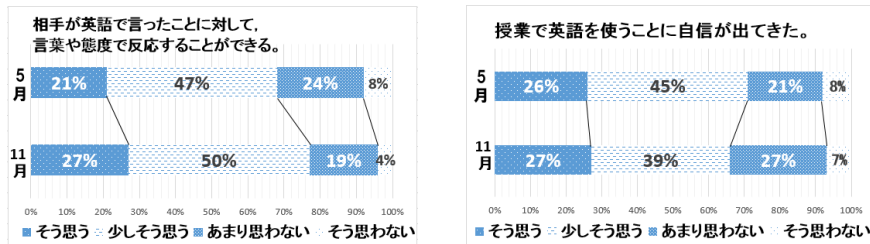
- 児童にとって親しみやすい歌やゲームを通して英語に触れる機会を低学年から作るとともに、進め方の研修を行い、全教員のスキルアップを図る。
- 中央研修の内容を踏まえた授業を公開し、小中連携で意見交換を行うことで、小中のスムーズな接続を図る。

具体の取組の内容

- 毎月第3火曜日の朝にEnglish time（15分間）を全学年において実施する。
- 校内研修において、中央研修の内容を伝達し、HRTがT1で授業ができるよう、クラスルームイングリッシュや活動を紹介する。
- 毎時間、授業の流れとめあてを示し、児童が安心して授業に臨むことができるようにする。
- 外国語を用いてコミュニケーションを図ることを意欲的に行おうとする児童を育成するために、日本の文化や異文化、自己や他者への気づきを持てる活動を取り入れる。
- 毎時間、めあてを明示し、児童一人一人が学びを実感できるよう、振り返りカードの充実を図る。
- 指導講師と連携し、公開授業において新教材の多様な指導法を提案する。

成果①

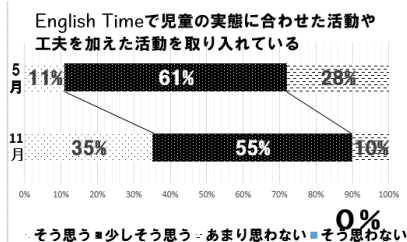
■ 児童の外国語活動に対する意欲の向上(対象:3～6年生児童 348名)



- 高学年では、少しずつ聞く力が向上しつつある。振り返りの中には、「前よりも先生が言っていることが分かるようになった。」「友達と好きなものが一緒だと気づいた。」などの記述が見られるようになった。
- 相手が言っていることによく耳を傾け、知っている言葉でなんとか反応しようとする様子は少しずつ見られるようになってきているが、自然にリアクションを取ることは難しい。今後、適切な手立てを見いだしていくことが必要と考える。
- 最初は英語を少し使ってみるだけでも、「できた。」という思いがあったが、英語に触れる機会が増えるにつれ、「もっとうまく話せるようになりたい。」という思いが芽生えてきているようである。そのため、「授業で英語を使うことに自信が出てきた。」という項目では、11月の結果が5月よりも低くなっている。しかし、実際のやり取りでは、以前よりも多くの表現を使い、生き生きと話している様子が見られる。

成果②

■ 教師の指導力・意識の向上(対象:学級担任 21名)



- 全校的な取り組みを行うことで、これまで外国語活動になかなか前向きに取り組めなかった教員も児童の発達段階や実態に合わせた活動を準備し、行うことができた。
- 他教科で培った教材研究のスキルを生かし、児童が意欲的に活動できる内容にアレンジする教師が増えた。

今後の課題・方向性

1. 教師の英語力と授業力の向上
 - スモールトークの進め方、授業づくり、クラスルームイングリッシュに関する校内研修を実施する。
 - 学級担任による授業の相互参観と授業研究会を実施する。
2. コミュニケーション活動の充実
 - スモールトークの時間を確保する。
 - 話す必然性のある活動の充実を図る。
3. 英語を安心して話せる環境づくり
 - 児童の実態に応じた「伝えたい」「聞きたい」と思えるコミュニケーション活動の設定をする。
 - 意欲的に英語を使ったコミュニケーション活動ができるよう、全教育活動を通じた児童間の良い人間関係づくりに努める。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～鳥栖市立基里中学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

ゆっくりと時間をかければ、自分の思いを伝えたり、相手の意向を理解したりすることができるが、即興的なやりとりを要する場面においては、応答に時間がかかり、文法の誤りも多く見られる。本研究では、自分の意見を前準備なしに相手に伝えたり、相手の意向に合わせて会話を継続したりする力を「発話力」とし、日常的に即興的なやりとりを行う経験を繰り返し行わせることでその育成を図る。

具体の取組の内容

- 1 単元毎に、学習内容が「英語を使って何をするための学習か」を生徒に明示・・・使用場面を明確にすることで、コミュニケーションに意味づけ
 - ・「Tokyo 2020 project～I know English (1年時)～→～I can use English (2年時)～→～I can do it for you in English (今年度)～」
- 2 「生徒が話す」活動を中心に据えた授業展開・・・教師の発話と生徒の発話の割合「2:8」を目標に、説明や指示の仕方を工夫
 - ・挨拶時の教師と生徒の役割逆転や、毎時間の「1minute talk」、各活動を指示した後の「Instruction checking quiz」で、生徒の発話機会を確保する。
 - ・各活動前に「useful classroom English」を提示し、生徒から教師へ、あるいは生徒同士も含めた「All English」授業を実現させる。
- 3 日常の中でも、英語を用いて短時間で「語る」場と、短時間でそれに対する「コメントを理解する」場を設定・・・授業以外でも英語を使う場面を工夫
 - ・「All English」で朝・帰りの会を実施させ、授業内容や評価、課題や準備物、翌日の連絡等に関する即興的なやりとりを毎日繰り返し経験させる。
 - ・連絡帳(翌日の時間割やその日の日記を記入するもの)の日記欄への記入を英語で行わせ、その日の出来事や自分の気持ちなどを、時間をかけずに英語で表現する経験を繰り返し行わせる。また、それに対し、教師が毎日コメントや質問を記入することで、生徒に短時間で相手の意向を理解したり、意向に沿って応答したりする経験を繰り返し行わせる。
- 4 発話力の育成を図るためのパフォーマンステストの実施・・・仮想「job interview」など
- 5 月に1度の教科部会開催による、英語科指導の共通理解と共通実践・・・取り組みに差異のない、チームとしての実践

成果①

- ・即興的なやりとりへの自信が、英語ができる自信へリンク・・・昨年度に比べ、英語検定受験率の増加が見られた。また、今年度は評定3～4の生徒が受検者の中心となっており、評定5の生徒で英語検定を受検していない生徒を含めると、CEFRがA1レベル以上の生徒は、60%を超える。
- ・発話力の育成・・・即興的なやりとりを要する英語検定の2次試験に、今年度も1次試験合格者全員が合格した。

英語検定3級	H29 (第3学年40名)	H30 (第3学年51名)
受験率	20%(8名)	45%(23名)
1次合格率	63%(5名)	86%(20名)
取得生徒割合	13%(5名)	39%(20名)

※H29年度は第3回、H30年度は第2回実施分まで

成果②

佐賀県内での統一テスト(第3学年)において、総合平均点、大問別得点率とも、市内3校と比べ高かった。また、総合平均点は、県の平均と比べても高かった。②については、語数制限を守れていないことから得点率が下がったが、無解答はならず、英作文の内容自体は意味の通るものを答えることができていた。

SAGAテスト(英語50点満点)の結果

	県	A中	B中	C中	本校	
総合平均点	22.9点	27.4点	23.0点	23.7点	30.0点	
大問別得点率	非公開	①リスニング	70%	62%	67%	72%
		②対話文読解および条件英作文	29%	21%	21%	35%
		③対話文読解	57%	47%	50%	62%
		④長文読解	60%	52%	50%	69%
		⑤対話文読解	57%	46%	47%	59%

※県の大問別平均点は公開されていない

今後の課題・方向性

自分の意見を伝えたり、相手の意向に合わせて話を継続していく「発話力」の育成に向け、引き続きこれまでの取組を継続させながら、更に効果的な手立ての開発について、学校全体で研究に取り組む必要がある。

- ・英語の使用場面の設定
 - 生徒が英語を使用する場面を校内だけに留めず、より「I can do it for you in English」を実感できるような場面設定の可能性について探りたい。ネイティブスピーカーのゲストティーチャー招聘や、ICTを活用した諸外国の生徒たちとのコミュニケーションなど、生徒が自分の「発話力」を実感することができる場面を設定することで、更なる生徒の「発話力」の高まりにつなぎたい。
- ・研究成果の発信
 - 定期的な校内での教科部会の開催を継続して行い、「発話力」を高める手立てについて研究していく。更に、今後は校内だけの取組に終始せず、研究成果を、鳥栖市内、あるいは佐賀県全体に示していきたいと考える。効果のあった取組や手立てについて発信していくことで、県全体の生徒の「発話力」育成を目指したい。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～佐賀県立致遠館高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ①中・高6年間の指導が一つの流れとして成立するために、中高連携の更なる強化 新CAN-DOの検証へ
- ②「表現するのが苦手」から「表現することが楽しい」へ ー生徒の「話す」自信と力の向上へとつながる授業改善ー
- ③英語外部検定試験の積極的な活用で、英語運用力の向上を精査

具体の取組の内容

- ①新CAN-DOリストにおける「つながり」を確認
 - ・英語科会議の在り方
 - ・中学・高校と同じ方向を向いているか、授業を検証
- ②「話す」活動を中心に据えた授業展開
 - ・small talkを帯活動に、多様な自己表現活動
 - ・「話せる」パフォーマンステストへの改善
- ③GTECを4技能受験へ
 - ・スピーキング試験を導入してその力を検証→授業へ活かす
 - ・6月と12月の伸びを確認

成果③

年度	2018		2017		2016	
	単純	累積	単純	累積	単純	累積
650						
600	12	12	5	5	6	6
550	25	37	19	24	17	23
500	32	69	31	55	28	51
450	48	117	39	94	45	96
400	58	175	57	151	52	148
350	47	222	47	198	37	185
300	13	235	22	220	23	208
250	2	237	5	225	4	212

年度	2018		2018		2018	
	単純	累積	単純	累積	単純	累積
8回A						
8回A						
8回A						
7	1	1				
6	1	2			1	1
5	22	24	28	28	24	25
4	116	140	114	142	112	137
3	74	214	56	198	54	191
2	5	219	7	205	3	194
1	2	221	1	206	1	195

GTEC(6月)スコア 3技能(左)とスピーキング

成果①

- ・前年度に1年かけて作成した中高6年間の新CAN-DOリストを各レッスンで意識するため、生徒のワークシートに毎回掲載→活動もそれに合ったものに
- ・英語科会議でCAN-DOに基づいた授業の取り組み方を検討
- ・中高で授業を公開し、CAN-DOに基づいた授業内容になっているかを、多くの目で検証

成果②

- ・10分間の帯活動でsmall talk
- ・トピックは自分のこと、身近なことから徐々に社会的なことに関する話題へ
- ・ペアを複数替えて、自分が話すことに慣れる
- ・パフォーマンステストは教科書をベースに、複数から一人へ(Role-Play×2回→Speech)
- ・Role-Playでは即興的な面も入れる
- ・パフォーマンスに入りやすくする工夫
- ・公開授業では「試してみたい」という意見が多数
- ・だんだん長く話す傾向



今後の課題・方向性

- ①授業を引き続き公開
 - 互いの気づきを交換することで内容の充実を図る
 - 互いに見合ってCAN-DOとの一致確認
- ②常に自己表現をすることを中心に据えた授業
 - 思考を生む、気づきを生む、表現を生む
- ③現時点で「伸び」については未検証
 - small talkなど、自己表現活動に重心を置くことで6月スコアでは過年度より伸びを確認できた
 - どう維持・発展させるか